

令和6年度やまがた緑環境税特集号

森林やまがた



上：やまがた緑環境税を活用して間伐を行った森林（河北町）

左：やまがた森の感謝祭2024（川西町）

右：やまがた木育体験会（イオンモール山形南）

目次

やまがた緑環境税を活用した森づくりに対する 県民の声	2
やまがた緑環境税について	3
荒廃のおそれのある森林の整備について	4, 5
再造林の支援（森林資源再生事業）について	6
森林資源循環利用促進事業・広葉樹林 健全化促進事業	7
みどり豊かな森林環境づくり推進事業	8, 9

自然環境保全対策の推進	10, 11
やまがた絆の森づくり推進事業・ 森づくりサポート体制推進事業	12
やまがた木育推進事業	13
やまがた森の感謝祭・やまがた緑環境税の 評価・検証委員会・森林ノミクス県民会議	14
各総合支庁予算事業の実績	15
やまがた緑環境税PR活動	16

「山を想う」

特定非営利活動法人まちづくり net 松山 高橋 真夕

「山」とは一体なんでしょう。私がやまがた緑環境税の評価検証委員に選ばれてからの3年間、この問いが幾度も心に去来しました。森林整備された場所を見学した時、有識者の方々の経験談やご意見を拝聴した時、会議の帰り道に葉山や月山を眺める車中。それから「山」に並々ならぬ思いを持っている人々との縁を得た際には、特に繰り返し考えます。私という個にとって「山」とはどのような存在か。3年前の私であれば簡潔に答えたと思います。「当たり前そこに存在だ」と。山形生まれの山形育ちにとって「山」は毎日目にする景色そのものであり、だからこそ故郷の原型として県民の心に刻まれているものだと、断じたことでしょう。

果たして、その断定は浅慮・早計ではなかったか。「当たり前そこに存在」という私なりの答えは「山」というものに真正面から向き合い、理解しようと努力した末の結論だったのか。やまがた緑環境税のお話合いの場にお呼びいただくようになってから自問自答しておりました。

少々話が逸れますが、私は仕事柄、風景画を描く方や土地に根差した民俗芸能を保全する団体、木材や山形の土等を使って作品を手掛ける職人の方とお会いする機会が度々あります。そんな時には、必ずと言っていいほど彼ら/彼女らは自分のお世話になっている「山」のことをお話してくださいます。彼らにとって「山」とは作品の原材料を得る場であり、作品の題材やインスピレーションを求める大きな存在そのものであるとおっしゃられます。また一方で「山を知らない人間が増えた」と言う苦言も多く聞かれます。ハイキングや観光、遊びのための「山」は知っていても自分の生活に根差したもの・自分の命の基礎の基礎だときちんと理解している人は少ない、と言うのです。以前であれば、私はそのような言葉に対して「時代の流れの中で人々にとっての「山」は肌近い営みの場から遠く眺めるものへと変化してしまったのでしょうか。寂しいですね」とでも答えたかと思えます。勿論、この寂しさは今も私の胸の内にございます。

しかし今、それ以上に焦燥感にも似た思いが生まれています。それは、やまがた緑環境税とそれに付随する種々様々な事柄を知る機会があったが故です。山形は四方八方を山に囲まれた土地なのだから「山」とは「当たり前そこに存在」だ？全くとんでもない無知と傲慢であります。

今でも、初めて会議に出席させていただいた時にナラ枯れ被害への対応を県が率先して行っていたと知った時の衝撃は忘れられません。私が中高校生であった時分、夕方の県内ニュースで幾度も取り上げられていた問題であったからです。父が稲刈りの際に「今年も山が黄色くて気味が悪い」と言っていた事も、祖父と叔父が「ナメコを採りに行く度、あの汚い茶色が目に入って嫌になる」とぼやいていた事も鮮明に覚えています。覚えているにも関わらず、会議でナラ枯れ対策の結果報告を聞くまで故郷の「山」がそんな問題を抱えていたことすら記憶の片隅に放っておいていたのです。恐らく、ほとんどの県民が私と同じでしょう。「山」が嫌いという訳でもなく「山」を全く知らない訳でもなく、むしろ山形の「山」を誇りにさえ感じている癖に「山」の現状を知らない・知ろうともしない。これが無知と傲慢でなくて何だと言うのでしょうか。

やまがた緑環境税は山での実務活動では大きな結果を出しています。森林整備も調査活動も継続していくことこそが重要な事業です。この事を多くの県民は知らねばなりません。春には若葉の初々しい翡翠の緑。夏の濃い深緑。秋の錦の紅葉。そして冬の威厳を湛えた雪の頂き。その全てが「県民の良く知る当たりの山」であるように、努力を重ねた結果であり、この努力に終わりはないことを知ってもらうことがこれからのやまがた緑環境税の大きな課題でしょう。「山」とは一体なんだろうという問いに対し、いつか少なくとも県民が「自分たちで当たりの姿を守ってきた故郷の宝だ」と答えられる日が来ることを強く願っています。そのためにも広報を含め、活動実績の報告の機会の増設や県民と「山」を繋ぐ活動のより一層の活発化を期待しています。なぜなら、継続的な事業には県民の深い理解と愛着が必要であるからです。

県民みんなで
支える森づくり



やまがた緑環境税

わたしたちのやまがた緑環境税

山形県では、山形の森林を守り育み、未来につなぐため、県民の皆様から「やまがた緑環境税」を納めていただいております。

やまがた緑環境税は、荒廃のおそれのある森林の整備や、県民参加の森づくり活動への支援、森林・自然環境学習等の推進等に使われています。

【やまがた緑環境税のしくみ】

県内に住む個人、県内に事務所等を有する法人を対象に、県民税の均等割に上乗せして課税しています。

【税率（年額）】

個人	1,000円
法人	2,000円～80,000円 (法人県民税均等割額の 10%相当額)

森林の持つ大切なはたらきを守るため、皆様の御理解と御協力をよろしくお願ひします。

【森林の多様なはたらき】

- 豊かな水を育み、安定して供給する
- 山崩れや洪水等、災害を防ぐ
- 空気をきれいにする
- 野生生物のすみかとなり、生物多様性を守る
- 快適な生活環境を守る
- 木材やキノコ等を生産する
- 自然に親しみ、森林で楽しむ
- 安らぎを与える
- 二酸化炭素を吸収し、酸素を供給する
- 地域の文化を育む



やまがた緑環境税活用事業について

やまがた緑環境税を活用した事業は、次の3つの施策を柱としています。

- I 環境保全を重視した森林施策の展開
- II みどり豊かな森林環境づくりの推進
- III 豊かなみどりを守り育む意識の醸成

これらを通じて、県土の保全、水源の涵養、自然環境の保全等の森林の公益的機能の維持増進及び持続的な発揮を目指し、事業に取り組んでいます。

2期目（H29～R8）の目標※達成に向けて、間伐や枯損木の伐採、県民参加の森づくりへの支援等を行っています。

※ 森林整備：11,600ha、税活用事業による森づくり参加人数：70,000人、認知度：50%

【令和6年度の取組み(主な事業)】

I 環境保全を重視した森林施策の展開 524,214千円

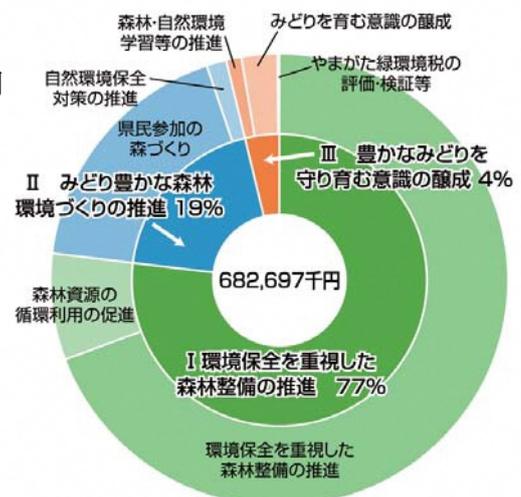
- ① 荒廃森林緊急整備事業 (477,723千円)
- ② 森林資源の循環利用の促進 (46,491千円)

II みどり豊かな森林環境づくりの推進 132,896千円

- ① 県民参加の森づくりの推進 (123,141千円)
- ② 自然環境保全対策の推進 (9,755千円)

III 豊かなみどりを守り育む意識の醸成 25,587千円

- ① 森林・自然環境学習等の推進 (7,387千円)
- ② みどりを育む意識の醸成 (17,526千円)
- ③ やまがた緑環境税の評価・検証等 (674千円)



荒廃のおそれのある森林の整備について

(荒廃森林緊急整備事業)

森林は、木材となる木を生産するだけではなく、土砂流出の防止、水源のかん養、自然環境の保全等の様々な公益的機能を持っています。しかし、長い間管理がされていない森林や病虫害被害等により活力が低下している里山林では、その機能が十分に発揮できていない場合があります。荒廃森林緊急整備事業では、森林の持つ機能を発揮させるため、やまがた緑環境税を活用し、森林整備を行っています。

人工林整備

1 スギ等人工林の再生（針葉樹林維持型）

長い間管理が行われず荒廃のおそれのある人工林で、間伐や森林作業道の整備を行い、併せて森林組合等が森林所有者に代わって長期的な管理を行い、スギ人工林を維持したまま公益的機能の発揮を目指します。令和6年度は432ha 実施見込みとなっています。



2 スギ人工林に広葉樹を導入（針広混交林型）

強度の間伐等を行い、スギ人工林へ広葉樹を侵入させ、広葉樹の生育促進を図り、人手によらない公益的機能の維持を目指します。



令和6年度の人工林整備の整備状況



整備前(河北町)



整備後



整備前(小国町)



整備後



間伐の様子
上:チェーンソーによる伐採
下:高性能林業機械(プロセッサ)による造材